

Title	Le Père Goriot における Psternité の問題
Author(s)	村田, 京子
Citation	女子大文学. 外国文学篇. 1995, 47, p.237-268
Issue Date	1995-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10466/10517
Rights	

Le Père Goriot における paternité の問題

村 田 京 子

序

Le Père Goriot は、人物再登場の技法の発見一つをとっても、バルザックの膨大な作品大系『人間喜劇』の要となる作品であるが、バルザックの最初の構想では、短編の予定で、表題にあるように、熱愛する娘たちにお金を絞り取られて「犬のように」¹死ぬゴリヨという父親の物語であった。ただ、この物語を語るにあたってバルザックは、全てに知悉している「全能の神」としての作者の立場ではなく、ゴリヨと同じ下宿 *maison Vauquer* に住む *Eugène de Rastignac* という青年の眼を通して、謎の存在ゴリヨの正体が次第に明らかにされていくという手法を取っている。ラスティニャックは、作者の自伝的要素を与えられた *double* 的存在で、*Le Lys dans la vallée* における作者の *double*, *Félix de Vandenesse* 同様、いわば語り手の立場に立っている。しかし、*Le Lys* とは違い、一人称の語りではなく、三人称の語りになっているのは、バルザックが筆を進めるうちに、ゴリヨの物語に平行して、ラスティニャック自身の物語が語られるという、語りの重層化が起こったためである。更にヴォケー館を起点にして、貴族の頂点に立つ *Faubourg Saint-Germain* と新興ブルジョワジーの住む *Chaussée d'Antin* を往復するラスティニャックの動きを通じて、当時 (1819-20年、王政復古期) のパリ社会が余すところなく描かれ、*Le Père Goriot* は、社会的・歴史的にも複雑な構成を持つ長編小説へと発展していくわけである。このように、ラスティニャックは、ある時は一人称の観察者・語り手となり、ある時は三人称の物語の主人公になるという2重の役目を担わされ、更に作者自身の野心・欲望が如実に投影された特権的存在となっている。

それ故、ラスティニャックを中心に据えるならば、*Le Père Goriot* は、一種の教養小説、roman d'apprentissage, roman de formation とみなすことができる。すなわち、田舎からパリに出てきた野心家の青年が、「泥沼」、「地獄」と形容されるパリで、強者として社会を支配していくために、今まで育んできた素朴で純真な心を徐々に捨てて、シニスムを身につけていく物語であるわけだ。最後に Père-Lachaise 墓地で、パリへの宣戦布告をする、彼の有名な台詞《A nous deux maintenant!²》でラスティニャックの自己形成は完了するが、そこに至るまでに、彼は Goriot, Vautrin, Mme de Beauséant による3つのイニシエーションを受けている。この3人の人物それぞれのもたらす教訓が、小説全体で繰り広げられるラスティニャックの内心の戦い（善・悪どちらを選択するか）に大きく絡み、錯綜した構図をなすわけだが、彼らは、何らかの形で paternité（実の父親 père naturel として、または精神的な父親 père spirituel としての役割、及び父性愛）と深い関係があるように思える。この小論においては、様々な意味における paternité を軸に、*Le Père Goriot* という作品を考察していきたい。

第一章

paternité でまず思い浮かべるのは、《Christ de Paternité》として、キリストの受難さながら、娘たちの罪を一身に引受け、苦しみながら死ぬゴリヨの存在である。ゴリヨの悲劇は、シェークスピアのリア王の悲劇をいわば、19世紀フランスのブルジョワ階級に置き換えたものである。すなわち、フランス革命の混乱に乗じて財をなした製麺業者ゴリヨは、2人の娘（Anastagie, Delphine）に莫大な持参金をつけることで、一方は貴族（Comte de Restaud）に、一方は銀行家（Baron de Nucingen）に嫁がせるが、浪費好きの娘たちに金を絞り取られ、最後は貧窮の極みの中で惨めに死んでいくというもので、リア王同様、娘たちへの盲目的な愛情が引き起こした、父親の悲劇と言える。

ラスティニャックが最初に目撃した真夜中の恐るべき光景—大事にしてい

た銀の食器を怪力でねじまげて塊にしなが、涙を流すゴリヨの姿一の謎が解けた時、ラスティニャックは、ゴリヨの娘を思う気持ちの崇高さに強く胸をうたれる。普段は痴呆状態にあるゴリヨも、paternité の情熱に駆られると、顔貌は一変して光輝き、周囲の者にまで影響を及ぼす、感情の伝播力を持つに至る。

Le père Goriot était sublime. Jamais Eugène ne l'avait pu voir illuminé par les feux de sa passion paternelle. Une chose digne de remarque est la puissance d'infusion que possèdent les sentiments. Quelque grossière que soit une créature, dès qu'elle exprime une affection forte et vraie, elle exhale un fluide particulier qui modifie la physionomie, anime le geste, colore la voix. Souvent l'être le plus stupide arrive, sous l'effort de la passion à la plus haute éloquence dans l'idée, si ce n'est dans le langage, et semble se mouvoir dans une sphère lumineuse. Il y avait en ce moment dans la voix, dans le geste de ce bonhomme, la puissance communicative qui signale le grand acteur. (161)

最後のゴリヨの死の場面でも、自分はカーテンすらないうらぶれた部屋で、激しい頭痛に襲われながらも、恩知らずの娘たちの幸福をひたすら願うゴリヨの姿に、ラスティニャックも、彼と共にゴリヨを看病するビアンションも涙せずにはいられない。完全な自己犠牲の中で、苦悶に満ちた死への道を辿るゴリヨには、いつしか神秘的な殉教者イエス・キリストの面影が現れ、彼は崇高な光輝く存在へと昇華されていく。バルザックは次のようにゴリヨを表現している。

Pour bien peindre la physionomie de ce Christ de la Paternité, il faudrait aller chercher des comparaisons dans les images que les princes de la palette ont inventées pour peindre la passion

soufferte au bénéfice des mondes par le Sauveur des hommes.
(231)

娘たちによる「優雅な父親殺し」(261)をつぶさに目撃したラスティニャックは、ゴリヨの死の床の陰惨な光景と、つい先ほどつらなっていた、ポーセアン夫人の華やかな舞踏会の光景（ここでは、豪華な衣装を身にまとったゴリヨの娘たちがダンスに興じている）とのあまりの落差に激しい衝撃を受け、結局、ゴリヨのような「美しい魂」は、この腐敗したパリ社会には生きていけないことを悟るのである。

このように、ゴリヨの死は崇高な悲劇と言えるが、一方それと同時に、お金と愛情を同一視してしまったプチ・ブルジョワの悲劇も垣間見られる。ゴリヨには常に、感情をお金に換算して考える癖がある。例えば、献身的に看病してくれたラスティニャックに対して、彼は次のような感謝の言葉を述べている。

[...] je voudrais vous remercier, mais je n'ai rien à vous donner que les bénédictions d'un mourant. Ah! je voudrais au moins voir Delphine pour lui dire de m'acquitter envers vous. (278) (下線筆者)

彼はここで、ラスティニャックにお礼をしたいが、自分には何もあげる物がない、せめて娘のデルフィーヌに自分に代わって恩返しをするよう遺言したいものだと言っているのだが、「恩返しをする」という意味で、《s'acquitter》「借金を返済する」という語を用いている。娘たちについてもゴリヨは、幼い時から彼女たちの欲しがる物は何でも買い与えることで、自分への愛情を得てきたのであり、いわば、娘たちの愛情をお金で買い取ってきたのである。ゴリヨの台詞：「わしは娘たちを愛するあまり、あらゆる侮辱を耐え忍んできた。その償いとして、娘たちはわしにちっぽけな恥ずべき喜びを高く売りつけた」(275) と、《vendre》「売る」という商売用語が使われている。一方、娘のレストー夫人は、「父親の死までも手形割りして

しまった」(266)と、《escompter》という動詞で表現されている。それ故、与える財産がなくなれば、娘の愛情も失われる。ゴリヨ自身、死ぬ間際になってその真理に気づき、ラスティニャックに告白している。

Ah! si j'étais riche, si j'avais gardé ma fortune, si je ne la leur avais pas donnée, elles seraient là, elles me lècheraient les joues de leurs baisers! je demeurerais dans un hôtel [...]; et elles seraient tout en larmes, avec leurs maris, leurs enfants. J'aurais tout cela. Mais rien. L'argent donne tout, même des filles. (273)

お金がなくなれば、彼は父親ですらなくなり、後は死ぬしかない。金を無心に来た娘たちを前にして、ゴリヨは絶望に駆られて叫ぶ。

Plus rien! dit-il en s'arrachant les cheveux. Si je savais où aller pour voler, mais il est encore difficile de trouver un vol à faire. Et puis il faudrait du monde et du temps pour prendre la Banque. Allons, je dois mourir, je n'ai plus qu'à mourir. Oui, je ne suis plus bon à rien, je ne suis plus père! (251)

要するに、ゴリヨの愛情は、お金と同じ経済原則で測られ、一度に放出して悉く使い果たしてしまえば、富と同様、愛情も破産してしまう。ランジェ公爵夫人がしみじくも、ゴリヨの悲劇を次のように要約している。

Notre cœur est un trésor, videz-le d'un coup, vous êtes ruiné. Nous ne pardonnons pas plus à un sentiment de s'être montré tout entier qu'à un homme de ne pas avoir un sou à lui. Ce père avait tout donné. Il avait donné, pendant vingt ans, ses entrailles, son amour ; il avait donné sa fortune en un jour. Le citron bien pressé, ses filles ont laissé le zeste au coin des

rues. (115)

ここで、ランジェ夫人は始めに、《nous》《vous》という普遍的な代名詞を用い、現在形の文章で語り出しているように、ゴリヨの悲劇を単に個人的な、特殊な事例とは考えていない。非情な一般原則（いかなる愛情も財産も全てを与えてしまうと破滅する）の一例として挙げているに過ぎない。彼女の言葉：「この世は泥沼なのだから、高みに留まっているようにしましょう」（115）や、「冷酷に打算を働かせば働かすほど、あなたは先に進めるでしょう。情け容赦なく打ちすえなさい、そうすればあなたは恐れられるでしょう。男も女も、中継の駅ごとに乗りつぶして捨てていく駅馬なみに扱いなさい。そうすればあなたの望む絶頂へと達することができます」（116）とラスティニャックに忠告するポーセアン夫人の言葉に裏打ちされているように、ゴリヨの悲劇は、単に個人的な次元だけではなく、社会的次元における必然性に基づくものである。すなわち、新興ブルジョワジーの台頭が目ざましい王政復古期においては、名誉や誇り、高邁な感情を尊ぶ貴族的精神は全く廃れ、お金によって名誉も地位も幸福すら買える、お金万能の時代へと変貌していたのである。ゴリヨ自身、フランス革命の混乱期に、小麦粉を買い占め、不当に値段をつり上げることで、莫大な財をなした成り上がり者ではない。自由・平等を標榜しながら、実は個人の利益のみを追求する個人主義に毒されたブルジョワジーの典型として、ゴリヨもまた、自分の娘に関することを除いては、何の関心も示さない。父親に蔑ろにされている気の毒な娘 *Victrine Taillefer* が身近かにいても、同情を寄せるわけでもない。ヴォートランが逮捕され、ヴィクトリーヌの兄が死んで、ヴォケー館の住人が大騒ぎをしているのをよそに、ゴリヨは泰然としてラスティニャックに言う。「それが私たちに一体どうだっていうのです。わしは娘と一緒に君のところで食事をするのですよ。あの子は待っています、さあ行きましょう」（225）。ゴリヨは、娘たちに象徴される腐敗・墮落したパリ社会の犠牲者であると同時に、その社会の構成員でもあったのだ。彼自身の言葉：「お金、それが人生です。貨幣が全てを作りだすのです」（242）がそれを証拠づけている。その上、節約を美德とするブルジョワ社会において、財産も愛情も一

拳に蕩尽してしまうゴリヨの生き方は、断罪されて当然の行為と言える。

また、革命を代表する「93年」の男、ゴリヨは、革命を否定し、貴族の復権を目指す王政復古の時代において、とりわけ、高い社会的地位にある2人の婿にとっては、忌まわしい過去を背負った排除すべき存在でしかない。ゴリヨは死の床で、「父親が足元に踏みにじられるようになったら、祖国も滅びるだろう」「社会も世間も paternité を中心に回っているのだから、子供が父親を愛さなければ、全てが崩壊してしまうだろう」(275)と嘆いているが、これも元を正せば、大革命に起因する。*Mémoires de deux jeunes mariées* の中で、Louise de Chaulieu の父親は、社会の悪の根源をまさに革命の中に見ている。「ルイ16世の首を切ることで、大革命は家族の全ての父親の首を切ってしまった。今ではもう家族は存在せず、あるのはただ、個人のみだ³」。ゴリヨは革命に加担して、父親の象徴としての国王を倒すことによって、自らの父親としての権威、家族という基盤を打ち壊してしまったのだ。

このように、ゴリヨの paternité は、政治的・社会的観点から見て、負のイメージを課せられるが、バルザック独特の哲学思想の観点から見ても、自己破壊的要素を秘めている。バルザックが《*Deux sentiments exclusifs avaient rempli le cœur du vermicellier*》(124)と描写しているように、ゴリヨにおいてはもともと、商売上の駆け引きのみに限定された知性と、妻に対する愛情という2つの感情しか存在しなかった。それを除いては、社会や人生についての知性を全く欠いていたのである。7年の幸福な結婚生活の後、不幸にも彼は最愛の妻を失う。妻の死によって行き場のなくなった愛情は、娘たちに集中的に注がれ、常軌を逸するまでに発展していく。更に商売を引退した後では、その愛情は一種のモノマニーと化すのである。ゴリヨに残された人間的感情は唯一つ、paternité のみに収斂され、ビアンシヨンの診断通り、彼は「永遠の父親」《*Père Eternel*》(119)となるのだ。

ところで、『人間喜劇』の根源をなす《*matérialité de la pensée*⁴》の原理によれば、蓄積された生命エネルギーが、観念、思想、情熱であれ、ある一点に集中され、一挙に放出されるならば、一瞬のうちに肉体の死をもたらす結果となる。バルザックは *Les Martyrs ignorés* において、pensée

を血液に譬えてその破壊性を説いている。

Pour moi, la pensée était un fluide de la nature des impondérables qui a en nous son système circulatoire, ses veines et ses artères; par son affluence sur un seul point, il agit comme une bouteille de Leyde, et peut donner la mort; un homme peut le tarir dans sa source par mouvement moral qui dépense tout, comme on peut tarir celle du sang en s'ouvrant l'artère crurale.⁵

夫によって財産を剥奪されようとしている娘たちの危機を前にして、父親として無力な自分を見出すことは、ゴリヨの paternité にとって、文字通り「斧の一撃」(240) となり、たちまち彼の死の要因となる。また、Per Nykrog は、バルザックの世界においては、どんなに称賛に値する感情でも、排他的になって抑制が効かなくなると、自己破壊的に働くことを指摘している。

Nous touchons ici à une des idées fondamentales de Balzac, souvent exprimée et encore plus souvent mise en œuvre. C'est d'abord que toute tendance ou toute aspiration, si justifiée et louable qu'elle soit, mène inévitablement à sa négation et à la destruction de son but ou de son porteur dès qu'elle est isolée et poursuivie exclusivement [...].⁶

愛情においても、愛情の否定である「打算」(calcul) と愛情は補完し合っ
て、常に平衡を保つ必要があり、ゴリヨの悲劇は、愛情を打算によって和ら
げずに、極限にまで押し進めたために起こったものだと、Nykrog は結
論づけている⁷。

以上のように、ゴリヨの paternité は、いかに崇高なものであるとはい
え、様々な次元において、破滅への道突き進むものであった。こうした彼
の人生の一部始終を観察・目撃したラスティニャックは、ある時はゴリヨに

感動し、ある時は彼に同情して恩知らずの娘たちを呪いながらも、次第に激しい欲望・野心に駆られ、正直な生き方よりは、権力や快楽を優先する生き方を選び取っていくのである。瀕死の老人が眠っている姿を眺めた後で、ラストニャックはビアンシオンに言う。「君は自分の欲望を制限した慎ましい人生を歩んでいきたまえ。僕は地獄にあって、そこに留まっていなければならないんだ」(268)。そして、最後にペール・ラシェーズの墓地にゴリヨを埋葬し、それと同時に「青春の最後の涙」、「清純な心の清い感動から迸った涙」(290)もそこに埋めた後、パリを俯瞰し、社会への挑戦を誓うわけだが、バルザックはこの小説の最後を次のような文章で締めくくっている。

Et pour premier acte du défi qu'il portait à la Société, Rastignac alla dîner chez Mme de Nucingen. (290)

ラストニャックが社会への挑戦の第一歩として出掛けていくのは、《chez Mme de Nucingen》であって、《chez Delphine》ではない。すなわち、純粋な愛情を捧げる恋人としてのデルフィーヌではなく、金持ちで多大な影響力を有する銀行家ニュシンゲンの妻 Delphine de Nucingen の所に赴くのである。そこに、女を踏み台にして成り上がっていくラストニャックの今後の姿が暗示されている。

従って、ゴリヨの弱者としての生き様は、ラストニャックに反面教師としての教訓を与え、彼の死は、ラストニャックがパリ社会に参入するためのイニシエーションの役割を担っているのである。

第二章

次に、ヴォートランとラストニャック、ポーセアン夫人とラストニャックの関係を焦点を当てて考えてみたい。ヴォートランはラストニャックをしばしば《mon petit》《mon cher enfant》《mon petit cœur》などと呼び、自らを《votre petit papa Vautrin》と呼んだり、ラストニャックへの語りかけの中に《Je vous aime》という言葉を何度も

差し挟んで、père spirituel としての愛情を吐露することで、ラスティニャックの保護者・父親の立場に自らを位置づけている。また、両者の関係においては、ラスティニャックに投げかけるヴォートランの視線が、強迫観念的と言えるほど、執拗に語られる。

[...] Vautrin, qui lui jeta un de ces regards par lesquels cet homme semblait s'initier aux secrets les plus cachés du cœur. (118)

Vautrin regarda Rastignac d'un air paternel et méprisant comme s'il eût dit : « Marmot!, dont je ne ferais qu'une bouchée! » (118-119)

Rastignac fut alors sanglé comme d'un coup de fouet par le regard profond que lui lança Vautrin. (131)

Le força évadé jeta sur Eugène le regard froidement fascinateur que certains hommes éminemment magnétiques ont le don de lancer, et qui, dit-on, calme les fous furieux dans les maisons d'aliénés. (211)

ヴォートランのラスティニャックに対する「誘惑」の物語は、ラスティニャックの心を見透かすようなヴォートランの「深い眼差し」が作りだす、いわば「眼の物語⁸」である。この、人の心を読み、催眠術的な眩惑をもたらす視線 (regard magnétique) は、バルザックだけではなく、メスメリズムを信奉するロマン主義世代 (例えばゴッティエ等) の作品にはおなじみのものであるが、ここではとりわけ、ヴォートランからラスティニャックへの一方通行の視線が強調されている。「君のことなら、まるでおれが君を作ったかのようによく知ってるよ」(135) とヴォートランは、ラスティニャックの過去、現在の状況を洞察し、彼の未来すら難なく予言する。とこ

ろが一方、ヴォートラン自身は陽気で気さくな、自称「商人」として登場するが、時として「彼の性格の恐ろしいまでの底深さ」(61)を覗かせて、彼の人の良さはうわべだけのもので、他人と自分を隔てる防壁に過ぎないことが容易に推察できる。彼はある時は、食卓を賑やかにするおどけ者であり、ある時は、夜中に見知らぬ男たちが部屋に出入りする、胡散臭い人物で、周囲の者のことは何でも知っているが、誰も彼の考えや彼のしている事を見極めることのできない謎めいた人物である。最後に警察に逮捕されて始めて、徒刑囚という彼の正体が暴かれるのである。それまで、ラスティニャックにとってヴォートランは、敵か味方かもわからない、透視不可能な存在で、彼は「全てを知り、全てを見ながら何も語らないスフィンクス」に譬えられている。

Rastignac ne pouvait donc pas demeurer longtemps sous le feu des batteries de Vautrin sans savoir si cet homme était son ami ou son ennemi. De moment en moment, il lui semblait que ce singulier personnage pénétrait ses passions et lisait dans son cœur, tandis que chez lui tout était si bien clos qu'il semblait avoir la profondeur immobile d'un sphinx qui sait, voit tout, et ne dit rien. (133) (下線筆者)

しかもヴォートランは、頑丈で力に溢れた、ヘラクレスのような体つきの男で、「35歩離れてスペードの1に、続けざまに5度命中できる」ピストルの腕前(135)を持つと同時に、Benvenuto Celliniの回想録をイタリア語の原本で読むだけの知識を有し、ルソーの弟子と自称するほどの哲学者でもある。このような彼がラスティニャックに対して取る態度は、「この世のことどもを究めつくした男」(136)の優越的なもので、いわば、ラスティニャックの師として、彼に「正直さなど何の役にもたない」(140)世界、「原理などは存在せず、あるのは事件だけ、法則など存在せず、あるのは状況だけ」(144)のバリ社会の実態を教え、社会に服従するか戦いを挑むか、人生の選択を決断するよう迫るのである。こうした意味においては、ヴォー

トランは、ちょうど小説冒頭において、ヴォケー館のサロンの壁紙の絵 (Fénelon の *Aventures de Télémaque* の主要場面が描かれている) に暗示されているように、パリ社会について無知で未熟な青年、ラスティニャックを、力、知識ともに優れた者が導き育てる mentor, initiateur としての paternité の役目を果していると言えよう。

ヴォートランは徒刑囚という、社会から疎外された者の立場⁹ から、社会の裏の仕組みをラスティニャックに明らかにし、その社会に君臨するための術策を授けているが、ヴォートランとは対極の、貴族の最高峰 Faubourg Saint-Germain にあって同じ役割を演じるのが、ボーセアン子爵夫人である。パリに出てすぐ、ゴリヨの上の娘、Madame de Restaud の所で、軽率にゴリヨの名を出して門前払いを食った後、ラスティニャックが訪れるのが、母方の遠い親戚にあたる彼女の屋敷である。彼が上流社会の作法を実地で研修するのは、ボーセアン夫人やレストー夫人の所であり、召使たちの忍び笑い、それぞれの愛人のダンディぶりや彼らの態度、声の抑揚、眼の動き、微妙な意味合いを帯びた会話等、社交界特有の記号を解読・理解することによって、彼は進歩を遂げていく。レストー夫人に対して犯した失敗を教訓にして、ラスティニャックはボーセアン夫人に対しては、世間知らずの、庇護を必要としている哀れな子供の役を演じることで、彼女の自尊心をくすぐり、関心を引くことに成功する。ここでバルザックは、次のように語っている。

Entre le boudoir bleu de Mme de Restaud et le salon rose de Mme de Beauséant, il avait fait trois années de ce *droit parisien* dont on ne parle pas, quoiqu'il constitue une haute jurisprudence sociale qui, bien apprise et bien pratiquée, mène tout. (109)

その後すぐラスティニャックは、ボーセアン夫人と「親友」ランジェ夫人との間で交わされる会話－優しい言葉の裏に、人の心を傷つける辛辣な皮肉の隠された、言葉による一種の決闘－に立ち会うことになる。興味深いことに、その間バルザックは一貫して¹⁰、ラスティニャックを《l'étudiant》もしくは《Eugène》という prénom で言い表している。一方、ボーセアン

夫人の側では、《Enfant! Oui, vous êtes un enfant》(109)、《Mais, enfant que vous êtes》(112) という言い方に明白に現れているように、彼を子供扱いしており、社交界に通暁したボーセアン夫人とラスティニャックの関係は、師-弟子の構図として捉えられている。

ボーセアン夫人に恋人ダジュダの裏切りをわざわざ知らせて、彼女の反応を窺いにきたランジェ夫人が去った後、ボーセアン夫人は、「短刀で人の心を探る」(115) 心ない友達の行為にひどく傷つきながらも、偉大な貴婦人としての誇りを失わない。そして、そこに呆然と立ち竦んでいるラスティニャックに、社会の実態を教え諭すのである。

—Eh bien, monsieur de Rastignac, traitez ce monde comme il mérite de l'être. Vous voulez parvenir, je vous aiderai. Vous sonderez combien est profonde la corruption féminine, vous toiserez la largeur de la misérable vanité des hommes. Quoique j'aie lu dans ce livre du monde, il y avait des pages qui cependant m'étaient inconnues. Maintenant je sais tout. (115-116)

「この世間という本」を読み尽くした今、「私は何でも知っている」という彼女の台詞は、そっくり、ヴォートランの台詞：《Je sais tout》(137) に呼応している。彼女は続いて、男も女も自分の野望を遂げるための道具でしかなく、たとえ真摯な愛情を抱いても隠し秘めておかねばならないこと、出世するためには誰か若くて金持ちの、優雅な女を見つけて彼女を足掛かりに社会に出ていく必要があると説く。その為に、ゴリヨの2番目の娘、Delphine de Nucingen に白羽の矢をたてるわけだが、これもヴォートランが Victrine de Taillefer の名を挙げるのと全く同じ動機に基づく。《A Paris, le succès est tout, c'est la clef du pouvoir》(117) という彼女の台詞は、《Si je réussis, personne ne me demandera; "Qui es-tu?" Je serai M. Quatre-Millions citoyen》(142) というヴォートランの台詞に、また、ランジェ夫人がボーセアン夫人の発した言葉：《Le

monde est infâme》に答えて言う台詞：《Infâme! non, [...] il va son train, voilà tout. Si je vous en parle ainsi, c'est pour montrer que je ne suis pas la dupe du monde. [...] Le monde est un borbier, tâchons de rester sur les hauteurs》(115) は、ヴォートランの台詞：《Voilà la vie telle qu'elle est. Ça n'est pas plus beau que la cuisine, ça pue tout autant, et il faut se salir les mains si l'on veut fricoter; sachez seulement vous bien débarbouiller : là est toute la morale de notre époque》(141) とそれぞれ、照応している。ボーセアン夫人やランジェ夫人は貴族の女性らしく、上品で柔らかな語り口で間接的に語り、ヴォートランの方は徒刑囚の言葉使いが端々に感じ取られる文体で、より具体的かつ直接的に語るという違いはあるが、語られている内容そのものは全く同じもので、それぞれが下す社会への価値判断を補強し合っている。その上、ボーセアン夫人は、彼女自らが「この迷宮にわけ入るためのアリアドネの糸として、私の名を貸してあげましょう」(117) とラスティニャックに申し出ているように、ヴォートラン同様、ラスティニャックに対して *mentor*, *initiatrice*, *protectrice* の役目を果している。

ボーセアン夫人もまた、ラスティニャックを除いては、他人に自分の心の動きを悟らせることはない。ダジュダがロシュフィード家に入るのを見たというランジェ夫人の意地悪な言葉に衝撃を受けても、彼女は顔色一つ変えない。

Mme de Beauséant ne se pinça point les lèvres, elle ne rougit pas, son regard resta le même, son front parut s'éclaircir pendant que la duchesse prononçait ces fatales paroles. (110)

ダジュダの結婚契約が署名される当日に催される、ボーセアン夫人の舞踏会には、彼女の様子を見ようと、好奇心にかられたパリ中の人々が押し寄せるが、彼女は超然たる態度で彼らを迎える。バルザックは、ヴォートランを「スフィンクス」に譬えたが、ボーセアン夫人は「大理石のニオベ像」に譬えて、次のように描写している。

Mme de Beaséant se tenait debout devant son premier salon pour recevoir ses prétendus amis. Vêtue de blanc, sans aucun ornement dans ses cheveux simplement nattés, elle semblait calme, et n'affichait ni douleur ni fierté, ni fausse joie. Personne ne pouvait lire dans son âme. Vous eussiez dit d'une Niobé de marbre. (264) (下線筆者)

いつもと少しも変わらない態度で、幸福に光輝いていた頃と同じ表情を見せる彼女に、どんな無感覚な連中でも驚嘆せざるを得ない。素朴で純真な心をまだ捨てきっていないラスティニャックのみが、彼女のconfidentとして、心の内で密かに繰り広げられる葛藤、苦悩の唯一の目撃者となる。彼は、夫人のダジュダに対する真実の愛情に触れ、ゴリヨの父性愛と同じように、彼女の愛情の崇高さに心を打たれ、崇拜の念を抱く。

Les rayonnements du visage de la vicomtesse apprirent à Eugène à reconnaître les expressions d'un véritable amour, et à ne pas les confondre avec les simagrées de la coquetterie parisienne. Il admira sa cousine, devint muet et céda sa place à M. d'Ajuda en soupirant. 《Quelle noble, quelle sublime créature est une femme qui aime ainsi! se dit-il. Et cet homme la trahirait pour une poupée! comment peut-on la trahir?》. (154)

彼にとってポーセアン夫人は、「イリヤードの中の女神たちの持つ偉大さ」(265)を有する女性で、かつてラスティニャックに答えた通り¹¹、彼女は貴族の誉れ高く、ダジュダの仕打ちに黙って耐える。「かくも気高く抑えられた苦悩」(266)に接してラスティニャックは、魂を揺さぶられるような激しい感動を覚える。ポーセアン夫人の舞踏会は、真実の愛に生き、敗れ去るポーセアン夫人と、不幸な者を鞭打つ、虚栄に満ちた社交界の面々が一堂に会する場であり、ラスティニャックの目の前で両者の赤裸々な姿が明らかにされていくのである。そして、苦悩に苛まれながらも、最後まで貴族的な誇

り・高貴さを失わずに去っていくポーセアン夫人の悲劇に立ち会ったことが、イニシエーションの役割を果たし、ラストニャックの教育の仕上げとなる。

Rastignac s'en alla vers cinq heures, après avoir vu Mme de Beauséant dans sa berline de voyage, après avoir reçu son dernier adieu mouillé de larmes qui prouvaient que les personnes les plus élevées ne sont pas mises hors de la loi du cœur et ne vivent pas sans chagrins [...]. Eugène revint à pied vers la maison Vauquer, par un temps humide et froid. Son éducation s'achevait. (267)

ところで、ポーセアン夫人がラストニャックに与えた忠告と、*Le Lys dans la vallée* でモルソフ夫人がフェリックスに送った手紙の内容には、類似点が多く見出せる。モルソフ夫人もまた、パリ社会に乗り出していくフェリックスに処世術を授けている。まず、どんなに利己的な社会であれ、そのまま受入れ、世間一般の掟に従うこと。誰にも自分の心の内を打ち明けることなく、距離を置いて慎重に振る舞うこと。とりわけ、若い女性はエゴイストで心が狭く、虚栄心を満足させるためなら相手を犠牲にすることも厭わないのだから、社交界では、勢力のある年老いた女性に取り入って後援者になってもらうのが出世の道である等で、自分の経験や、宮廷で影響力を持っていた叔母や父親、夫などから得た様々な知識を、「これから世間の大人たちの中へほとんど一人で飛び込んで行こうとしている¹²」彼女の「養子」フェリックスに、伝授する形を取っている。この意味においては、モルソフ夫人もまた、ポーセアン夫人同様—ポーセアン夫人の強烈なシニスムは、かなり薄められてはいるが—フェリックスに対して *mentor, initiatrice* の役割を果たしていると言える。

しかしながら、モルソフ夫人の場合、師—弟子の関係というよりは、母親—息子の関係が強く、更に、心の内に秘められた、恋人としての愛情が行間を読みとれる *mère amante* 的立場にある¹³。彼女のフェリックスに対する *mère spirituelle* としての愛情は、献身的かつ自己犠牲的なもので、愛

する子供の未来を予知することのできる、母親特有の「神秘的な力¹⁴」すら伴うものである。こうした特徴は、ボーセアン夫人には全く見られない。両者の違いはどこから来るのだろうか。これは、2人の女性にバルザックが与えた価値観の違い、すなわち、純然たる感情の気高さをうたったモルソフ夫人と、歴史的・社会的観点における気高さを持ったボーセアン夫人との相違によるものである。モルソフ夫人は、貴族の一員ではあるが、田舎に引き籠もった廃人同然の亡命貴族の妻でしかなく、社会的には何の影響力も持たない。一方、ボーセアン夫人は、パリ社交界に君臨する女王、「準王家ともいうべきブルゴーニュ家最後の娘」(263-264)としての誇り高き女性、Chaussée d'Antin のブルジョワ女性デルフィーヌにとって、彼女のサロンに受け入れられるためには「サン・ラザール通りからグルネル通りまでの泥をすっかり舐める」(116) ことすら厭わないほど、政治的にも社会的にも大きな力を持った女性として描かれている。要するに、彼女は生まれも育ちも良く、富・美貌・教養・才気にも恵まれ、貴族の最高の資質を備えた人物である。しかし、こうした貴族性は、*Le Père Goriot* の舞台である王政復古期においては、時代遅れとなり、消滅する運命にあった。ましてや、バルザックがこの小説を執筆したのは、1830年の7月革命によってブルジョワの勝利が確立された後の、1834年から35年にかけてである。この小説を書くにあたって、彼が執筆当時の時代風潮に無意識にでも影響を受けたことは、疑いもないことである。愛情より財産を取った恋人ダジュダの裏切りはまさしく、誇り高い、偉大な貴族の時代から、お金万能の個人主義的なブルジョワの時代への移り変わりを象徴するもので、ボーセアン夫人は、本来の崇高さ、偉大さに汚点を残さないためには、社交界を引退して、この卑小で凡庸な社会から自らを追放せざるを得ない。彼女が最後に催した華やかな舞踏会は、消えゆく定めにある貴族的価値の最後の煌きであり、哀惜の念を込めて描かれている。そこに居合わせたラスティニャックは、ゴリヨの悲劇と合わせて、その深い意味を読み取り、社会への幻滅を感じている。

以上のように、ボーセアン夫人は、一つの歴史的・社会的価値を体現した存在で、ラスティニャックと彼女との結びつきは、モルソフ夫人とフェリックスとの関係とは違い、愛情によってではなく、一種の社会契約によるもの

である。パリという迷宮にあって、ラスティニャックを導くために彼女が貸し与えるのは vicomtesse de Beauséant という彼女の名前であり、彼女の従弟であることが、彼がパリの貴族社会に入るための通行証 (passe-partout) となるのである。実際、いつでも親切に受け入れてくれるボーセアン夫人をあてにして、ラスティニャックが彼女の邸宅を訪れたところ、冷たくあしらわれ、貴族の傲慢さ、エゴイスムを彼女の中に発見する場面がある。

Quand il entra, Mme de Beauséant fit un geste sec, et lui dit d'une voix brève: « Monsieur de Rastignac, il m'est impossible de vous voir, en ce moment du moins! je suis en affaire... »

Pour un observateur, et Rastignac l'était devenu promptement, cette phrase, le geste, le regard, l'inflexion de voix, étaient l'histoire du caractère et des habitudes de la caste. Il aperçut la main de fer sous le gant de velours; la personnalité, l'égoïsme, sous les manières [...]. Il entendit enfin le MOI LE ROI [...]. Eugène s'était trop facilement abandonné sur sa parole à croire aux noblesses de la femme. Comme tous les malheureux, il avait signé de bonne foi le pacte délicieux qui doit lier le bienfaiteur à l'obligé, et dont le premier article consacre entre les grands cœurs une complète égalité. (150) (下線筆者)

ラスティニャックはボーセアン夫人と、「麗しい契約」(その第一条には、身分の上下に関わらず、優れた心の持ち主は完全に平等であることが認められている)を結んだと勝手に思い込んでいたが、それも幻想であったことに気づくのである。ボーセアン夫人がラスティニャックと契約を結んだとすればそれは、不実な愛人によって社交界を追われる夫人が一彼女もまた、この点に関しては、ヴォートラン同様社会から疎外された者として一彼女の庇護と引換えに、社会への復讐をラスティニャックに託した契約と考えられる。

従って、ボーセアン夫人(及び、彼女との会話において同じ教訓を与えて

いるランジェ夫人)は、女性であるが故に、ラスティニャックに対して *mère spirituelle* の役割を果していると言わねばならないが、モルソフ夫人のような本来の *maternité spirituelle* と区別する意味で、ヴォートランと同じ *paternité spirituelle* に属すると考えられる。社会の対極にあるポーセアン夫人とヴォートランが、ラスティニャックに同じ内容の忠告をし、いわば、表と裏の立場から彼の *protecteur, initiateur, mentor* の役割を演じていると言えよう。

第三章

この章ではまず、ヴォケー館の庭の菩提樹の下で繰り広げられる、ヴォートランのラスティニャック「誘惑」の場面を見ていきたいと思う。この場面に関しては *Françoise van Rossum-Guyon* が、詳細に分析しているので、彼女の分析を参考に考察してみたい¹⁵。ヴォートランはまず、前述したように、保護者としての優越した立場に立って青年の注意を引き、機嫌を取り、または、「熊の背中のような、鹿毛色の毛で覆われた毛むくじらの胸元」(136)を誇示して、彼を怖じ気づかせ、強い印象を与えるのに成功している。また、ラスティニャックを若い娘に譬えて、あたかも彼が、誘惑の対象としての女であるかのような言葉使いをし、エロティックな匂いを漂わせさえしている¹⁶。続いて、ラスティニャックの過去、現在に触れ、将来を予測するにあたって、彼が辿る人生のパターンを幾つかに分けて想定している。ここでは例えば、「30歳頃、君は年収1200フランの判事になるだろう」「40にして、年収6千リーヴル位の持参金つきの、製粉業者あたりの娘と結婚するだろう」(138)と、具体的な数字を挙げている。それは客観性を持たせると同時に、ラスティニャックの金銭欲を刺激する効果をもたらしている。しかも、ヴォートランの論法に従えば、正直に生きるよりも、不正な手段を使う方が収入の額が増し、社会的地位も上がる仕組みになっている。このように、数字を膨大に積み重ねていくことで、ラスティニャックの野心を燃え立たせる一方、ヴォートランは、偽善・虚栄に満ちた社会の現状を明らかにしている。一夜のうちに子供から財産の半分を奪い取ったダンディが2か月の禁固

刑で、切羽詰まった状況から千フラン紙幣を一枚盗んだ哀れな男には苦役が課せられる。それがこの社会の法律だ。本当に殺人を犯して血を流せば罰せられるが、人を騙して死にいたらしめても紳士とみなされる。この世には確固とした信条などないのだから、「人間を軽蔑し、法の網をうまく潜りぬける編み目を見つけた方がいい」(145)とラスティニャックに忠告するのである。またある場合には、100万フラン稼がせてやるから、2割の手数料をもらいたい、という純粋な商取引を装ったりもする。

このようにヴォートランは、保護者的なディスクール、誘惑のディスクール、数学的・商取引的なディスクールなど様々なレトリックを駆使して、ラスティニャックの野心や欲望をかき立て、自分の申し出への承諾を促している。ヴォートランがこれほどの熱意、知恵を結集して語るのも結局、徒刑囚という社会から疎外された者として、美青年の貴族ラスティニャック¹⁷を介して社会を征服し、社会への復讐を果たすためである。要するにラスティニャックは、ヴォートラン自身の野望を実現する道具でしかない。ところで、ヴォートランが、ラスティニャックや彼の家族の生活を要約してみせる時、次の引用にあるように、《vous》を使うべき箇所がいつの間にか《nous》にすり代わり、後になるほど加速度的に《nous》が多用されている。

Voici votre compte, jeune homme. Nous avons, là-bas, papa, maman, grand-tante, deux sœurs [...], deux petits frères [...], voilà la contrôle de l'équipage. [...] La famille mange plus de bouillie de marrons que de pain blanc, le papa ménage ses culottes, maman se donne à peine une robe d'hiver et une robe d'été, nos sœurs font comme elles peuvent. [...] Nous avons une cuisinière et un domestique, il faut garder le décorum, papa est baron. Quant à nous, nous avons de l'ambition, nous avons les Beauséant pour alliés et nous allons à pied, nous voulons la fortune et nous n'avons pas le sou, nous mangeons les *ratatouilles* de maman Vauquer et nous aimons les beaux dîners du faubourg Saint-Germain, nous couchons sur un grabat et

nous voulons un hôtel! (137) (下線筆者)

この一人称複数《nous》は、Françoise van Rossum-Guyon が解釈しているように、「優越のnous」であると同時に、「共犯関係」をもたらす《nous》である¹⁸。しかしながら、この《nous》は、ラスティニャックを単なる道具とみなすだけではなく、彼の肉体の中に入り込み、彼の魂を自分の物として思うように扱いたいと望むヴォートランの欲望の現れでもある。それは「神様を真似る」(136) や「神の役割を引き受けて天の思し召しを果たす」(144) といった彼の台詞に顕著に表され、創造主 (paternité divine) たらんとするヴォートランの姿が浮かび上がってくる。ただ、神に代わって人間の魂を自由にする行為はむしろ悪魔的で、事実、バルザックは随所でヴォートランを「誘惑者」(tentateur)、「悪魔」(diable) と呼んでいる。「おれは、君達が呼ぶところの芸術家なのだ」(136)、「おれは偉大な詩人だ。おれの詩は書くのではなく、行為の中に、感情の中に存在するのだ」(141) とヴォートランが言う時、彼は、神を映し出す鏡として、神の創造を真似る詩人ではなく、神が絶対に創造主ではあり得ない悪を作り出し、実践する「悪の詩人」たらんとしたのである。Max Milner は次のように述べている。

Il s'agit de s'emparer d'une âme, de la vider de sa liberté, qui est l'effigie de Dieu en elle, et de s'y loger à la place du Créateur. Pleinement satisfait de son œuvre, l'artiste satanique jouira alors des harmonies qu'il aura su tirer de son instrument humain, et ces harmonies, qui seront des sentiments réels, lui donneront non pas l'illusion, mais la réalité de la possession du monde.¹⁹

先に触れた、ヴォートランの視線(ラスティニャックを魅惑すると同時に恐怖を抱かせる磁気的な視線)は、バルザックの初期小説 *Centenaire* に登場する悪魔的な人物 Béringheld²⁰ や、*Le Père Goriot* と同時期に書

かれた *Melmoth reconcilié* の中の Melmoth の視線²¹ と同じもので、ヴォートランがラスティニャックに提案する取引は、「悪魔との契約」(pacte) の様相を帯びてくる。後に書かれた *Illusions perdues* の中では、ヴォートラン自身が《pacte》という言葉で Lucien de Rubempré に対して繰り返し使っているが²²、*Le Père Goriot* では、ヴォートラン自身の台詞には直接見出せない。ただ、語り手の言葉として《l'idée d'un pacte avec cet homme》(187) とあり、作者が既に pacte の概念を念頭に置いていたことは明らかである。ヴォートランの台詞の中にも《je vais vous faire une proposition que personne ne refuserait.》(141); 《ce que je vous propose》《ce que je vous demande》(142) 等に pacte が暗示されている。ヴォートランから「悪魔の誘惑」を受けたラスティニャックは、契約に署名することを躊躇し、一旦は勤勉で清純な人生を送ろうと決意する。しかし、チュイルリ公園に散歩に行き考えが変わる。

Cette promenade fut fatale à l'étudiant. Quelques femmes le remarquèrent. Il était si beau, si jeune, et d'une élégance de si bon goût! En se voyant l'objet d'une attention presque admirative, il ne pensa plus à ses sœurs ni à sa tante dépouillées, ni à ses vertueuses répugnances. Il avait vu passer au-dessus de sa tête ce démon qu'il est si facile de prendre pour un ange, ce Satan aux ailes diaprées, [...]; il avait écouté le dieu de cette vanité crépitante dont le clinquant nous semble être un symbole de puissance. La parole de Vautrin, quelque cynique qu'elle fût, s'était logée dans son cœur [...]. (149) (下線筆者)

ヴォートランの悪魔的な言葉は、ラスティニャックに強烈な印象を与え、彼の教えが次第にラスティニャックの内に浸透し、彼自身の悪を呼び起こす契機となる。

このような関係は、ヴォートランとラスティニャックの間だけではなく、少し違う形ではあるが、実はゴリヨとラスティニャックの間にも見出せる。

ゴリヨもヴォートラン同様、ラスティニャックを何度も《mon enfant》《mon cher enfant》と呼び、最後には「私の唯一の子供」(273) とすら呼んで、彼をあたかも自分の子供であるかのように扱っている。それも結局、ラスティニャックが娘デルフィーヌの恋愛の相手である為で、娘を愛し、裏切らない限り、ゴリヨの愛情の対象たり得るのである。ゴリヨが率先してラスティニャックと娘の仲を取り持つのは、「愛の歓びを味わったことのない」デルフィーヌに、彼女には「奪われていたあらゆる快楽を必ずや学生が与えてくれるだろうと、父親として予感し」(162)、ラスティニャックが娘と親密な仲になったら、もっと娘に接近でき、よりよく歓待してもらえると、いう魂胆からである。こうしたゴリヨの娘に対する振る舞いには、単なる父親としてではなく、熱狂的な愛人の側面が見られる。ラスティニャックとデルフィーヌのためにダルトワ街に、瀟洒なアパートを設えてやった時の彼の喜びぶりは、度を越したものである。

La soirée tout entière fut employée en enfantillage, et le père Goriot ne se montra pas le moins fou des trois. Il se couchait aux pieds de sa fille pour les baiser; il la regardait longtemps dans les yeux; il frottait sa tête contre sa robe; enfin il faisait des folies comme en aurait fait l'amant le plus jeune et le plus tendre. (232)

このように、ゴリヨの愛情表現はあまりに激しくて、ラスティニャックに嫉妬を抱かせるほどである。その上、娘の涙で濡れたラスティニャックのチョッキを是が否にでも買い取ろうとする場面や、娘の服に触れたがったり、娘の髪の毛を掴んで死のうとする場面に現れているように、フェティシズムの傾向が、または娘を弁護して言う台詞：「みんなわしの過ちからきたことだ。わしを踏みつけにする習慣を娘につけさせてしまったのだから。わしはそうされるのが好きだったのだ」(276) にはマゾシズムの傾向すら窺える。要するにゴリヨの paternité には、近親相姦的な愛情が潜んでいるのだ。ラスティニャックを娘の愛人に仕立てる彼の行為は、ラスティックを通じて自

分自身の願望を遂げようとする、ゴリヨの無意識のなせる業で、ヴォートラン同様、ラスティニャックを道具にして自分の欲望の実現を享受しようとする《jouissance par procuration》の原理がそこに働いていると考えられる。ここでも《nous》という人称代名詞が効果的に使われている。この《nous》は、ダルトワ街の部屋で、ラスティニャックがデルフィーヌに、2人の愛の秘密を誰にも漏らさないよう誓う場面で用いられ、ゴリヨは露骨に自分の願望を表明している。

《Vous êtes une de ces créatures que l'on doit adorer toujours, lui dit-il à l'oreille. [...] plus vif et sincère est l'amour, plus il doit être voilé, mystérieux. Ne donnons notre secret à personne.

—Oh! je ne serai pas quelqu'un, moi, dit le père Goriot en grognant.

—Vous savez bien que vous êtes nous, vous...

—Ah! voilà ce que je voulais. (227-228)

更に、ゴリヨの死ぬ間際の言葉：「あなたは私の息子だ、ウジェーヌ、彼女〔デルフィーヌ〕を愛してくれ。彼女のために父親になってくれ」（277）には、自分に果たせなかった「良き父親」の役割をラスティニャックに託すと同時に、自分の死後、ラスティニャックの内に自らを蘇らせたいと願う、pacte とはいえないまでも、一種の pacte 的なものを彼に呈示しているように思われる。

以上のように、ゴリヨとヴォートランにおいて「相手の魂と一体化したい」という同じ欲望が見られるが、両者において、決定的に違う点が存在する。バルザックは、1835年の *Werdet* 第二版で付け加えた序文で、ゴリヨの感情について次のように語っている。

Le Père Goriot est comme le chien du meurtrier qui lèche la main de son maître quand elle est teinte de sang; il ne discute pas, il ne juge pas, il aime. Le Père Goriot cirerait, comme il

le dit, les bottes de Rastignac, pour se rapprocher de sa fille. [...] Il aime Rastignac, parce que sa fille l'aime. Que chacun regarde autour de soi, et veuille être franc, combien de pères Goriot en jupon ne verrait-on pas? Or, le sentiment du Père Goriot implique la maternité. (46) (下線筆者)

ゴリヨの感情には maternité の要素が含まれていたのである。バルザックの理想とする paternité (ゴリヨにはなれなかった paternité) は例えば、*Ursule Mirouët* において《trinité paternelle²³》を構成する、医者 of Minoret, 軍人の Jordy, 牧師の Chaperon の 3 人の老人が象徴しているように、「知性」(intelligence) や「判断力」(jugement)、「道徳心」(morale) に富み、時には「打算」(calcul) も伴うものである。それに対し、maternité は「優しさ」(tendresse)、「自己犠牲」(dévouement)、「細やかな世話」(soins) といった特徴があてはまり、何よりも、子供と肉体的に密着した状態からくる「官能性」(volupté) と結びついたものである。*Mémoires de deux jeunes mariées* に登場する、maternité の権化 René de l'Estrade が告白している。

Dévouement! me suis-je dit à moi-même, n'es-tu pas plus que l'amour? n'es-tu pas la volupté la plus profonde, parce que tu es une abstraite volupté, la volupté génératrice?²⁴

ルネは生まれたばかりの赤ん坊に乳をやりながら、至福とも言える喜びを覚える。「赤ん坊の唇は何とも言えぬ愛らしさで、それが乳房に吸いつくと、苦痛と同時に快楽を、苦痛にいたる快楽を、あるいは快楽によって終わる苦痛を感じます²⁵」。ゴリヨがラスティニャックに語る娘への愛情—「わしの人生は、2人の娘の中にあるんです」(160)「子供の肌にぴったり結び付けられ、子供が歩けばこっちまで歩いた気になるんです」(161)—は、ルネの愛情と本質的には変わらない。「わしが父親になった時、神を理解した。神は全く至る所にいるんだ、だって、万物は神から生じたのだから」(161)と

いうゴリヨの言葉と、「子供が母親の全ての神経繊維に結びついているように、万物は神様と結ばれているのです。神、それは母親の偉大な心なのです²⁶」というルネの言葉は全く重なるものである。

ゴリヨの愛情は、子供のすることなら悪徳でも何でも、判断せずに受け入れる本能的な愛情である。バルザックは、*Pensées, sujets, fragments* では《la paternité d'instinct, de passion et à l'état du vice du père Goriot²⁷》という定義づけを行なっている。これは、否定的な maternité の領域に属するものである。ただそれと同時に、真の母親が到達することのできる、崇高なる maternité の片鱗もゴリヨの中に見出すことができる。*Le Cabinet des Antiques* の中で、Victurnien を養育した彼の叔母 Mlle Armande について、バルザックは次のように述べている。

[...] sa tante était vraiment une mère pour lui; mais quelque tendre et prévoyante que soit une fille, il lui manquera toujours je ne sais quoi de la maternité. La seconde vue d'une mère ne s'acquiert point. Une tante [...] peut l'aimer autant que l'aimerait la mère, être aussi attentive, aussi bonne, aussi délicate, aussi indulgente qu'une mère; [...] mais son cœur n'aura pas ces avertissements soudains, ces hallucinations inquiètes des mères, chez qui, quoique rompues, les attaches nerveuses ou morales par lesquelles l'enfant tient à elles vibrent encore, et qui toujours en communication avec lui reçoivent les secousses de toute peine, tressaillent à tout bonheur comme à un événement de leur propre vie. Si la Nature a considéré la femme comme un terrain neutre, physiquement parlant, elle ne lui a pas défendu en certains cas de s'identifier complètement à son œuvre [...].²⁸ (下線筆者)

ヴォートランに見た創造主としての paternité が、対象とする人間の魂に入り込み、相手の魂を自分の物にすること、相手の魂を無にして自由に操

り、自分の意思を反映させることであるとすれば、maternité の方は、上記の引用にあるように、自分の魂を無にして、相手の感情、相手の生そのものと一体化することで、それをバルザックは「母親の第二の眼」と呼んでいる。要するに、「相手の魂と一体化する」という同じ行為でも、paternité と maternité では方向が逆で、一方は相手の魂を、他方は自分の魂を無の状態にして相手と一体化するのである。ゴリヨが重い病の床に伏しながら、舞踏会で華やかに踊っている娘たちと一体化し、彼女たちの喜びを自分のこととして喜んでいる様は、まさに「母親の第二の眼」を通してであると言える。そして、ラスティニャックとの関係でも、ヴォートランは paternité の側から、ゴリヨは一面において、むしろ maternité の側から彼に接近していると解釈できないだろうか。「鋭い視線」でラスティニャックの心を見抜くが、誰にも自分の心は読み取らせないヴォートランとは正反対の立場から、ゴリヨはラスティニャックの魂と一体化したいと願っているのである。

結 論

以上見てきたように、*Le Père Goriot* には、様々な形の paternité がゴリヨ、ヴォートラン、ポーセアン夫人等に体现され、それぞれが、歴史的・社会的・哲学的意味を付与された複雑な paternité を形成している。しかも、こうした paternité のドラマが全て、ラスティニャックを軸に、彼を媒介に展開されている。Pierre Citron は《*Le Père Goriot est un roman de formation par la paternité*²⁹》と評しているが、まさに *Le Père Goriot* は、複数の paternité (その奥に maternité が潜む) の物語であると言える。ラスティニャックは、こうした様々な paternité のもたらす教訓を糧にしながらも、彼らと pacte を結ぶことを拒否し、一人で社会に戦いを挑む大人へと成長していく。ゴリヨは死に、ポーセアン夫人は田舎に引き籠もり、ヴォートランは逮捕されてパリを離れてしまった後、最後にたった一人パリに留まって、ペール・ラシェーズの墓地からパリを見下ろす彼の姿がそれを象徴していると言える。

また、最後の章で見たゴリヨの maternité はその後、*Illusions perdues*

や *Splendeurs et Misères des courtisanes* の2作品の中で、リュシアンに対するヴォートランの *paternité* の中に融合し、ヴォートランは、*paternité* と *maternité* を兼ね備えた、より統合的な存在へと変貌していく³⁰。バルザック自身、後年になってハンスカ夫人が彼の子を宿したことを知った時、非常に喜んで、赤ん坊が生まれる前から Victor という名前をつけ、次のような手紙を書き送っている。

Quant à V[ictor], il existe, et, si tu le veux ainsi, nous le reconnaitrons par l'acte de mariage; mais donne-le-moi, que je lui prodigue mes soins et que je le couve comme tu l'auras porté, je m'en ferai ainsi un peu la mère.³¹

お腹の子に対するハンスカ夫人の冷淡さにバルザックは恐れ戦き、彼女に哀れみを乞う時、子供と一体化した《nous》という代名詞を使って、彼の内の *maternité* の感情を表明している。

Je ne te parlerais que mon cœur, et c'est ce que j'aurais peut-être dû faire, car je ne t'aurais pas vue si dure pour ce pauvre Vict[or], que tu nies. Oh! lplp., aime-nous bien, je mourrais de chagrin de te voir froide pour nous.³² (下線筆者)

ハンスカ夫人との子供は結局、早産で死んでしまって、バルザックは実人生においては、父親としての喜びは得られなかったが³³、彼の作品『人間喜劇』の中で、二千人も登場人物を動員して一つの世界を作り出すことで、創造主としての *paternité* を遺憾なく発揮している。全ての人物の心を知悉し、思うままに操る行為は、まさしくヴォートランの目指していたものである。一方、*Facino Cane* の一節³⁴ にあるように、前を歩いている労働者夫婦の魂の中に、自分の魂を移し、彼らの生活や欲望を自分の物として感じる力をバルザック自身が備えており、これはゴリヨやモルソフ夫人の持っていた「母親の第二の眼」によるものと考えられる。バルザックは実人生で

経験を重ねていくうちに、結局、こうした paternité と maternité を兼ね備えて始めて、完全な創造主 Créateur になれるという思いを強くしていったのではなかろうか。こうした観点から見れば、*Le Père Goriot* は、バルザックが paternité に対する考察を深めていく上での、重要な出発点となる作品であるように思える。

注

この小論は、1994年10月29日、京都教育文化センターで行われたコロック「ヴォートランの変貌」において、「ラスティニャックを中心に」という題のもとに発表したものを、大幅に加筆・訂正したものである。

1. 《Sujet du *Père Goriot*. —Un brave homme—pension bourgeoise —600 fr.de rente—S'étant dépouillé pour ses filles qui toutes deux ont 50,000 fr.de rente, mourant comme un chien.》 *Pensées, sujets, fragments, Œuvres complètes*, Club de l'Honnête Homme, Paris, 1956, t.24, p.688.
2. *Le Père Goriot, La Comédie humaine*, éd. Pléiade, Garnier, Paris, 1976, t.Ⅲ, p.290. 本文中の *Le Père Goriot* の引用は全てこの版からのもので、以下、引用の後にページ数のみを記す。
3. *Mémoires de deux jeunes mariées, La Comédie humaine*, éd. Pléiade, t. I, p.242.
4. 《matérialité de la pensée》に関しては、拙稿「バルザックの『意志論』」京都大学フランス語学フランス文学研究室発行『仏文研究XⅢ』1981, pp.180-208 を参照のこと。
5. *Les Martyrs ignorés, La Comédie humaine*, éd. Pléiade, t. XII, p. 745.
6. Per Nykrog, *La Pensée de Balzac dans la Comédie humaine*, Munksgaard, Copenhague, 1965, p.135.
7. *ibid.*

8. 西岡範明、『バルザック全集』東京創元社 月報 No.16
9. 例えば、次のようなヴォーランの台詞 : 《J'ai bien réfléchi à la constitution actuelle de votre désordre sociale》(136) の中で、《notre》の代わりに《votre》を使うことで、自分が社会から疎外された者であることを意識している。
10. バルザックは一度だけ《Rastignac》と呼んでいるが、それはポーセアン夫人に加えてランジェ夫人も自分の庇護者になってくれるだろうと、彼が野心的な目論見を抱いた時に使われている。
11. デルフィーヌを始めとするブルジョワ女性は、恋人に裏切られたらすぐ、復讐を考えるが、「あなたならどうしますか」というラストニャックの問いに、ポーセアン夫人は「私ならば、黙って苦しむでしょう」(154) と答えている。
12. *Le Lys dans la vallée*, éd. Pléiade, t. IX, p.1084.
13. モルソフ夫人がフェリックスへの *maternité* を表明している箇所は、例えば《Ne sera-ce pas une maternité spirituelle que cet engendrement du système auquel un homme doit rapporter les actions de sa vie, une maternité bien comprise par l'enfant?》(*ibid.*, p.1084) 《cher enfant de mon cœur》(p.1086) 《songez, [...] que dans une vallée vivra pour vous une mère [...]》(p.1096) 等である。また、彼女はフェリックスに相応しい恋人を想定しながら、自分の愛情を吐露している : 《Cette femme ne sera jamais elle, elle ne devra jamais penser à elle, mais à vous; elle ne vous disputera rien, elle n'entendra jamais ses propres intérêts et saura flairer pour vous un danger [...]》(p.1095)
14. *ibid.*, p.1096.
15. Françoise van Rossum-Guyon, *Vautrin ou l'anti-Mentor*, in EQUINOXE N° 11, Rinsen, Kyoto, 1994, pp.77-83.
16. ヴォートランから100万フラン提供しようと申し出のあった時に見せた、ラストニャックの様子を、ヴォートランは次のように若い娘に譬えて、自らを誘惑者の立場に置いている。《vous faites meilleure mine à

vosre petit papa Vautrin. En entendant ce mot-là, vous êtes comme une jeune fille à qui l'on dit: "A ce soir", et qui se toilette en se pouléchant comme un chat qui boit du lait.» (136-137)

17. この時代に出世するためには、貴族の称号を持ち、有力な女性の庇護のもとに地位や財産を得るのが一番有効な手段であり、ヴォートランがターゲットとする青年は、homosexualité の問題を抜きにしても、どうしても美青年の貴族であらねばならなかった。
18. «Ce "nous" est évidemment ici un nous de supériorité: celui de l'infirmière à son malade ou de l'instituteur à ses élèves. Mais l'emploi de cette première personne du pluriel permet au locuteur de postuler une relation de comlicité [...].» Françoise van Rossum-Guyon, *op.cit.*, p.79.
19. Max Milner, *La Poésie du Mal chez Balzac*, in *L'Année balzacienne* 1963, Garnier, Paris, pp.330-331.
20. «Mais rien ne pourrait donner une idée des yeux de cet être étrange[Béringheld]: [...] s'étendaient au loin, sous le front, deux cavités noires et profondes, du fond desquelles un reste de lumière, un filet de flamme animait deux yeux noirs [...].» Horace de Saint-Aubin, *Le Centenaire, ou les deux Béringheld*, t. I, pp.72-73, Bibliophile de l'Originale, Paris.
21. メルモスはヴォートラン同様、全能の力を誇っている : «Ne sait-tu pas que tout ici-bas doit m'obéir, que je puis tout? Je lis dans les cœurs, je vois l'avenir, je sais le passé. » (*Melmoth reconcilié*, éd. Pléiade, t. X, p.364) メルモスの「磁気的な視線」も繰り返し語られている : «un regard de feu qui vomissait des courants électriques» (p.366) «Ses yeux jetaient un feu sombre qui blessait par un éclat insupportable» (p.370) 等。
22. *Illusions perdues*, éd. Pléiade, t. V, p.703, p.708.
23. *Ursule Mirouët*, éd. Pléiade, t. III, p.817.

24. *Mémoires de deux jeunes mariées*, *op.cit.*, p.310
25. *ibid.*, p.320.
26. *ibid.*
27. *Pensées, sujets, fragments*, *op.cit.*, p.743.
28. *Le Cabinet des Antiques*, éd. Pléiade, t.IV, pp.984-985.
29. Pierre Citron, préface à l'édition Garnier-Flammarion du *Père Goriot*, p.19, Paris, 1966.
30. 2 作品の中では、ヴォートランが《maternel》《mère》という語で表現される箇所が見られる。とりわけ印象的なのは、*Splendeurs et Misères des courtisanes* で、リュシアン之死を知らされて悲嘆にくれる彼の台詞である。《Vous n'êtes pères, si vous l'êtes, que d'une manière; ... je suis mère aussi!... 》(éd. Pléiade, t.VI, p.817)
31. Balzac, *Lettres à Madame Hanska, Œuvres complètes*, Les Bibliophiles de l'Originale, Paris, 1967, t.3, p.401.
32. *Ibid.*, p.408.
33. 実際には1834年に、Maria du Fresnay との間に女の子が生まれ、1836年に comtesse Guidoboni-Visconti との間に男の子が生まれている。ただ、どちらもバルザックは養育に一切タッチせず、子供に殆ど関心を持っていない。(Jean-A. Ducourneau, *Balzac et la paternité*, in Europe 1965, pp.190-201 参照)
34. *Facino Cane*, éd. Pléiade, t.VI, pp.1019-1020.